地質ニュース641号，54－66頁，2008年1月
Chishitsu News no.641, p.54－66, January, 2008

ライマン雑記（22）

副　見　恭　子[1)]

1．Tokuの死

「1901年（明治34）1月23日．昨夜六時半，女王オズボーンにて死去す．弔いの半旗揚げられけり．街，みな喪に服せり．余もまた黒きネクタイを締め，異国の臣民ながら弔意をあらわさんとす．余に黒手袋を売りし店の男，“新世紀の開始，甚だ幸先悪し”と嘆く．」(註1)．

滞英中夏目漱石が書いた日記からの引用文のように，20世紀はビクトリア時代の終幕から始まる．1901年1月23日，日の没するところなしと謳歌した大英帝国を築いた女王の葬儀が行われ，それに世界の目が集中した．

血は水よりも濃しで，アメリカ国民はこぞって女王の死去を深く哀悼した．ノースハンプトンの人々は殊に英国との関係が密であった．彼らの先祖は，1654年に町作りをした最初の定住者である．17世紀の初頭，大西洋を渡り，無事マサチューセッツ湾の植民地に到着，やがて西方に移動し，現在のコネチカット州にハートフォードを建設した．その一団の流れが北に進み，楽園ノースハンプトンを見つけた．皆上流階級に属した英国人で，その中にライマンの先祖ジョンとリチャードの名が残っている．

続いて，8ヶ月後の9月6日，第25代アメリカ大統領ウィリアム マッキンリーが無政府主義者チェルゴーズに銃撃された．自国で起こった大事件だけに，国民は忽ち興奮と緊張の渦に巻き込まれた．大統領の容態の報告に一喜一憂し，回復を祈ったが，遂に14日訃報に接した．過去1865年，第16代大統領エイブラハム リンカーン，1881年に第20代大統領ジェームスガーフィールドが暗殺され，マッキンリーは三人目であった．付け加えると，1963年に暗殺された第35代大統領ジョン F. ケネディは4番目の犠牲者である．

1901年9月14日の新聞“ノースハンプトンヘラルド”は，大きくマッキンリーの肖像を掲げ，彼の死を報じた．そのすぐ右斜め下に，[Death of Toku Nakajima]の見出しで，Toku Nakajimaが土曜日に死去したことを告げる記事が目に入る（第1図）．土曜日とは，マッキンリーが息を引きとった同日14日である．

最近までE. H. バニスター書店で働き，皆によく知られていたToku Nakajimaが，長い間療養していたエルムストリートのブルアー家で，今朝10時頃死亡した．数ヶ月肺を患い，ラットランドの病院に入院していたが，薬石効なく，病は次第に重くなった．馴染みの仕事場で彼の姿が見られず，寂しく思った人々は少なくない．彼の夭折は広く一般の哀惜を喚起することであろう．
Toku Nakajimaは20年余りこの町に住み，多くの心の友と崇拝者を得た．彼は人を引きつけ，礼儀正しく，明るい青年であった．彼は習性慎重で注意深く，将来への宿望を抱いていた．
彼は約29年前に日本で生まれ，8才の時にノースハンプトンにやってきて，B. S. ライマンによって育てられ，すばらしい教育を受けた．Tokuは，1889年ここのハイスクールを終了し，続いてペンシルベニア大学に入学，1894年卒業後，更に法科に進んだ．しかし事情があって望んでいたプランを放棄し町に戻ってきた．本屋で働き，申し分ない手腕をみせていたが，病気で余儀なく仕事を中断していた．Mr. Nakajimaはユニテリアン教会の青年部ですぐれた仕事をなした．家族関係は殆ど知られていない．葬儀は未定だが，多分月曜日の午後となるであろう．

並々ならぬTokuへの哀惜が溢れた記事である．読む者は誰もが悲しみを深めたことであろう．

この死亡記事を読み，ライマンは始めて想像さえし

1）元マサチューセッツ大学東洋コレクション司書：8 Eaton Court Amherst MA 01002 U.S.A

キーワード：Tokuの死，ジョーゼフ ヘンリー，ライマンの功績，日本再訪

The following telegram expressing Northampton's sorrow and sympathy with Mrs. McKinley was forwarded this morning:

George B. Cortelyou, Esq.,
Secretary,
Buffalo, N. Y.

As citizens of Northampton, Massachusetts, the undersigned beg leave to express, in one voice, to the wife and kindred of our revered President the profoundest sympathy for the bereavement under which, with them, the entire nation bows in one common affliction and sorrow.

Arthur Watson, Mayor, Egbert I. Clapp, City Clerk, George Watson Clark, City Treasurer, William P. Strickland, William G. Bassett, John C. Hammond, Benjamin E. Cook, Arthur G. Hill, John B. O'Donnell, Henry A. Kimball, Henry P. Field, John L. Mather, George W. Cable.

VEGETABLES IN ALASKA.

Dr. Allen Predicts That Territory Will Raise Its Entire Supply.

Dr. E. W. Allen, assistant superintendent of experiment stations conducted by the agricultural department, has just returned after a ten weeks' tour of inspection of the stations in Alaska. Dr. Allen reports, according to the Washington Post, that all the hardy vegetables are being grown there, and he predicts that the time will come when Alaska will grow a sufficient supply of them.

He also says that wheat, oats, barley and rye have been matured at the stations, and he thinks it practicable to raise beef for the home market. He states that there is considerable inquiry for land along the coast from people living in northern Europe and predicts that the time will come when many of them will find more comfortable homes there than they now have.

How the Wind Blows In Yankeedom.

Nature delights in presenting striking contrasts, says the Boston Herald. This year she has given New England the biggest crop of hay and the smallest crop of hay fever known for years.

Bad blood and indigestion are deadly enemies to good health. Burdock Blood Bitters destroys them.

OBITUARY.

DEATH OF TOKU NAKAJIMA.

Toku Nakajima, until recently a clerk at E. H. Banister's bookstore and well-known throughout the city, died about 10 o'clock this morning at the home of the Misses Brewer on Elm street, where he had lived for some time. For several months he had been a sufferer from consumption, and treatment at the Rutland hospital was unavailing and the disease had gained too firm a hold upon him. The young man had been missed from his accustomed place by many people and his untimely death will cause general regret. During his residence of about twenty years in the city Mr. Nakajima had won a large number of warm friends and admirers. He was a young man of attractive personality, courteous manner and cheerful disposition. By habit he was studious and observing and had ambition to make a successful career, of which there was bright promise.

Toku, as he was familiarly called by all his friends, was born in Japan about 29 years ago. When eight years of age he was brought to this country and to Northampton by B. S. Lymac, who took the little Japanese to his home and gave him an excellent education. He was graduated from the High School in 1889 and from the University of Pennsylvania in 1894. Then he studied law in the university law school for about two years until circumstances compelled him to abandon his cherished plans. Returning to this city he became a clerk in Banister's book store where he gave satisfactory service until sickness compelled him to give up work. Mr. Nakajima had been prominent in the work of the Unitarian Young People's Society. Little is known here of his family connections. Funeral arrangements have not been completed but the service will probably be held Monday afternoon.

Buffalo, Sept. 14—The managers of all the local theaters met at noon to-day. It was intended originally to close all the theatres to-day but owing to the large advance sale in the various places of amusement this was deemed unwise. All the theatres will close on the afternoon of the removal of the body of the President from this city, and it is also probable that they will close on the day of the funeral.

第1図　Tokuの死亡記事.（ノースハンプトン ヘラルド 9月14日 1901年）.

なかったTokuの世界，ノースハンプトンの人々との強い絆を知ったのである．これまでに両者間に量り知れないコミュニケーションの溝があった．主と従の関係であったからだろうか．それともTokuがアメリカ人として育った過程を認識せず，一筋に彼の幸福が日本人社会に定着することにあると信じていたからであろうか．9月14日Tokuの埋葬日にライマンの驚きが最高潮となる．それらはノースハンプトンのフォーブス図書館が保管していた数少ない書簡から知ることができた．

ライマンの死後，彼のぼう大な蔵書，文書，地図等々は3箇所，即ち，米国哲学協会図書館（所有権はフィラデルフィア自然科学院），ペンシルベニア歴史協会と前に述べたフォーブス図書館に分散された．1979年マサチューセッツ大学は，まずライマン和漢書をフォーブス図書館から借用し，1988年ライマンコレクション保存運動を行った結果，日本の皆さんから多大な支援を受け購入し，それと共に書簡，野帳，写真，地図，報告書等を入手することができた．現在フォーブス図書館にはライマンの和漢書以外の書籍と浮世絵が残っている．

マサチューセッツ大学図書館が所有する書簡は，1889年から1902年までの手紙を中心とし，他の二つの図書館と比べると真に少ない．筆者は，各図書館にライマン資料を寄贈するため選別に当たったアルバート J. エドモンズが，Tokuとノースハンプトンの関係を考慮して，これらの書簡をフォーブス行きの荷に加えたのではないかと思えてならない．エドモンズはライマンの親しい友で，司書，仏教研究家として日本でも知られていた人物である．「ライマン雑記」の最後の章で，彼について触れてみたい．

1839年に発行された桑田権平著「来曼先生小伝」は，ライマン研究家にとって非常に貴重な本である．桑田はライマンの助手であった桑田智明の甥で，1884年14才の時，叔父智明に連れられノースハンプトンへやってきた．

彼はフィラデルフィアの厳めしい，お高い日本留学生と違い，日本の因習から遠ざかり，ノースハンプトンの生活にすんなりと入り，のびのびと青春時代を楽しんだ．Tokuと一緒にライマンのボートを漕いだり，水泳をしたりした友達で，Tokuが心を開いた唯一の日本人であったのではないかと思う．

桑田権平とライマンの間柄は，Tokuとのような緊張感が全く無かった．むしろ，ライマンが江戸で馴染んだ日本の中流階級の家庭的雰囲気を身につけている権平に親しみを持ち，ノースハンプトンで，心身共に発達していく十代の彼を，興味を持って見守っていたのではないだろうか．

Tokuの葬儀後，雑事を終えフィラデルフィアに帰りしばらくして，ライマンはTokuの死亡について，あちこちへ手紙を書き始めた．桑田権平，賀田貞一，安達仁造の順で，まずTokuを知っていた三人に報告した．その中で，権平への手紙が最も詳細である．Tokuの友達であり，ブルアー姉妹（第2図），町の人々もよく知っていたし，それに彼は6年余りノースハンプトンの居住者でもあった．彼ならよく理解してくれると，ライマンは心のおもむくままに書いたと思う．この手紙を中心にして，Tokuの病気から葬儀までの経路を辿ってみよう．

8月27日，Tokuの肺と腸の出血が激しくなり，最早命は長くないと診断されたので，ハンナ ブルアーが彼を引き取り，エルムストリートの家に帰ってきた．ブルアー姉妹の献身的な看護が始まると，町の人々も至れり尽くせりの手を差し伸べた．例えば，気休めのためにと，Tokuを馬車で誘い出したり，山海珍味を届けたりと，療養中のTokuを慰めた．ランチカート（Lunch cart）の経営者，ミスター ラハーはTokuの病状を聞いて，妻の為にと思って貯えていた千ドル余りを，そのお金で南部へ行き静養するように申し出た．

Tokuは，静かで我慢強かった．しかし，療養から戻ってくると，何事にも興味を失い新聞すら読まなく

第2図　ライマンの両親，姉妹とブルアー姉妹．（Historic Northampton蔵）．

なった．12日の夜，病状は益々悪化し，ミス ファニーが一夜彼を見守り，金曜日の夜は，看護人のミスターノートンが付き添った．しかしToku自身は病気の重大さに気付かず，死の数日前まで，次週はスミス大学の新学期が始まるので，自分が本屋に戻れるだろうかと案じ続けた．

土曜日の朝，彼は少なくとも8時頃までは意識があり，朝刊のマッキンリー大統領の死をはっきり認識したが，その後次第に意識が薄れ，脈拍も弱まり，9時10分過ぎにとうとう息を引き取った．

9月17日土曜日の午後，ブルアー家で葬式が行われた．

おびただしい数の人々が集まり，Tokuに敬意を表した．見事な花束，花輪で埋もれる中，特に大そう立派な花枕(flower pillow)が目立った．ミスターラハー，Tokuの馴染みの床屋さん，職場の二人の友人の4人から贈られたもので，彼らはTokuの熱烈な礼賛者であった．葬儀はユニテリアン協会のクレシイ牧師が司祭し，Tokuが彼や協会の青年たちの相談や頼み事を誠意をもって聞き入れた誠実な人柄について，深い慈愛にあふれた弔辞を述べた．式が終わると，4人のスミス大学の教授とTokuと親しかった人たちが棺に付き添い，ブリッジストリート墓地に向かった．ブルアー姉妹，ライマン，ボストンから駆けつけた妹メリーたちが乗った馬車を先頭に，長い行列が続いた．そしてTokuはライマンの祖父の墓の近くに埋葬された．

「約19年前，あなたとTokuがノースハンプトンに着いた翌日の夕暮れ，町外れの墓場を通った時，Tokuが幽霊がさまよっているのではないかと，恐れおののいたことを覚えていますか？」とライマンは賀田に書いている．そのブリッジストリートのライマン家の墓地で，Tokuは今も安らかに眠っている．

彼の死を悼む人々の話を聞けば聞くほど，ライマンが抱いた，野心もなく，意気地ないというTokuのイメージは消え，頼もしい青年に変っていった．Tokuのノースハンプトンでの活躍の話は尽きることがなかった．彼の雇い主の妻ミセス バニスターは，「大きな損失だ」と嘆き悲しんだ．クレシイ牧師の尽きないTokuへの哀惜と賛辞，また，Tokuが写真技術を身に付けようと素人写真のフィルムを現像して，小遣いの足しにしていたことも知った．数ヶ月前，ライマンの従弟で，炭鉱共同経営者のフランク ライマンや彼の親族から，Tokuの写真業の資金を援助する話が出ていたので，本屋の店主ミスター バニスターは，Tokuに辞められてはと非常に心配し，雇い人ではなく，彼にパートナーになってくれと申し込んでいた事も判った．

初めての日本人留学生新島襄が卒業したアマースト大学，「少年よ大志を抱け」のウィリアム クラークが学長であったマサチューセッツ農科大学(現在マサチューセッツ大学)，そして二校の名門女子大，スミス大学とマントホリヨーク大学が集まるパイオニヤ盆地は，新しいハンプシャー大学を加え，現在も由緒ある歴史を有する学術地域である．当時に於いても，この地方には数多く書店が存在していた．その中でTokuがず抜けて書籍に造詣深く，最高のセールスマンとして名声を博し，大学関係はもとより教養ある顧客の間で尊敬され慕われていたことを知ったライマンの喜びと誇りは如何ばかりであったであろうか．一介の馬丁の息子のすばらしい成功物語と感激するのは筆者一人のみではあるまい．

2. ジョーゼフ ヘンリー

1979年10月1日，ローマ法王ジョン ポール二世がボストン訪問のため休校となった．市の図書館は開館していると聞き，友達の美術商に頼まれていた浮世絵鑑定のため，フォーブス図書館を訪れた．この図書館に浮世絵があることを思い出し，参考として調べたいと願っていたので，正に絶好のチャンスとばかり勇んで家を出た．これがライマンとの縁の発端となった．

歌麿，豊国，国芳を中心に，時間をかけて調べ上げ，美術司書ミスター ダニエル ロンバートにお礼を言って帰ろうとした時，ふっと2年前に耳にした“マサチューセッツ州西部のパイオニヤ盆地の何処かの図書館に，日本の古書，まぼろしの本が存在する”という噂を思い出した．

過去に何度か図書館巡りをして探そうと試みたが，時間の食い違いがあったり，架空の本ではなかろうかと疑ったりと，なかなか目的を果たせなかった．さりげなく「ここの図書館に古い日本の本がありますか」と尋ねると，“Yes”と簡単な答えが返ってきた．戦前出版された本かと聞くと，どうももっと古そうである．しかし閉館間近であったため，再訪を約束して辞し，外へ出ると雨が降り始めていた．すっかり興奮したのか，雷雨の中バスを待っていても，少しも気にならな

かったことを覚えている．

数日後，マサチューセッツ大学の日本関係の教授達とフォーブス図書館を訪れ，地下室で古い本箱にぎっしり詰まった和漢書と対面した．そしてそこに目指すライマンコレクションは粛然として並んでいた．1921年の春，ペンシルベニアから運ばれ，板野新夫（マサチューセッツ農科大学）と中川久順（アマースト大学）によって目録が作られて以来，誰も触れた者がいない印象を受けた．古事記，東海道中膝栗毛，四書集注，江戸名所図会等を見ている中に，明治初期の知識人の書斎に立っているかのような錯覚に陥った．そして，寄贈者の名がベンジャミン スミス ライマンであることをしっかりと銘記したのである．前記した浮世絵の一部も，彼が日本から持ち帰ったものであった．

やがて，マサチューセッツ大学図書館が，ライマン和漢書コレクションを5カ年契約で借りることになり，フォーブス図書館を訪れる回数が増えてくると，ライマンについて何でも知ろうとばかり，旺盛な好奇心が出てきて資料を貪り読み始めた．1872年出版の［Genealogy of the Lyman Family in Great Britain and America］を始めとして，ノースハンプトンの歴史，ベンジャミン S. ライマンの伝記，彼の生涯の友であったフランクリン B. サンボン資料等々の本，雑誌，書簡，新聞記事を探しては読んだ．

勿論，桑田権平の「来曼先生小伝」も読んだ．末尾の桑田智明遺稿「来曼先生閲歴概要の抜粋」に「馬丁の一子徳松をライマンが家庭の人として修学せしめ，遂に某大学校法科を卒業せしめたるに，惜しむべし，不幸にして同人は卒業後夭逝せり」(註2) という数行を見つけ，これが何故か筆者の心に鮮やかに残った．

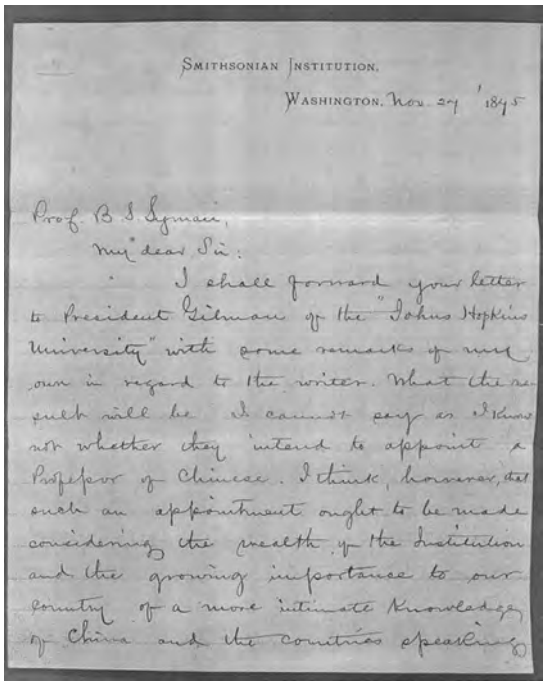
ライマン和漢書の英文目録を作るのに忙しい上，六ヶ月の「ライマン研究休暇」を取って日本へ行ったりと，1年以上フォーブス図書館から遠ざかっていたが，1981年10月初めに，北海道開拓使記念館の関 秀志氏が，“アメリカの北海道史料を訪ねて”のテーマの下，アマーストとノースハンプトンに調査に来られることによって，筆者とフォーブス図書館の関係が再開した．

彼の調査の下調べに，フォーブス図書館から手渡されたミス・オルドリッチが作成した『予備ライマン文書目録』を用いた．5ページの目録は，さして役に立つとは思えなかった．まさか［Maps of Japan, in Japanese］の中に，かの名高い「日本蝦夷地質要略之図」などが含まれているとは，想像さえ出来なかった．それよりもオルドリッチが最後のページに“ジョーゼフ ヘンリー文書助手”と書いた職名のヘンリー文書に関心を抱いた．

読者は，「ライマン雑記（7）」に掲載された1872年にライマンがProf. ヘンリーに送った開拓使地質鉱山技師の雇用条件につき質問している電報を覚えておられるであろうか．当時筆者は，ヘンリーがスミソニアン研究所の一員に過ぎないと思っていた．ところがヘンリーについて調べてみると，膨大な資料が眼前に展開し，彼がベンジャミン フランクリン以来の最高の科学者であり，19世紀の多くの発明が，ヘンリーの基礎的研究から発展していることを知った．電気工業学，地質学，気象学，天文学等々彼の分野の巾は非常に広い．1846年49才の時，研究を断念して，初代スミソニアン研究所長となり，以後死去するまでの約32年間，将来のアメリカ科学の進歩のために尽くされた人である．就中，彼の卓越した人柄について“これほど頌徳された科学者は今後も絶無であろう”と書かれた文を読み，ライマンと彼の書簡が存在するだろうかと好奇心で一杯となった．

まず，オルドリッチの関与したジョーゼフ文書について調べることにした．1966年に米国哲学協会，米国自然科学院，スミソニアン協会がジョーゼフ ヘンリー文書を企画している．1972年の第1巻を始めに，以後2004年までの間に10巻が出版された．それらは1797年から1865年までの68年間の文書を集録している．ライマンの資料があるとすれば，それが最後に出版される11巻となろう．

「開拓使外国人関係書簡目録」にヘンリーとライマンの書簡があるが，開拓使に関する事務的な内容に限られている．出来ればヘンリーの個性を表すような手紙があればと願った．米国哲学協会図書館だけでも，ライマン文書は手紙，地図，イラストレーションその他を含めて総数約1万8千あると言われる．筆者は1996年の夏，その中から日本に関する資料を大ざっぱに選択し，コピーしているが，当時ヘンリーの存在すら知らなかったので，さしたる期待もなく試みに自作索引カードを調べると，ライマンが江戸からヘンリーへ書いた1875年10月20日と翌日の21日付けの2通の手紙が見つかった．次にペンシルベニア歴史協会でコピーした中にヘンリーの手紙があり，しかも前出の



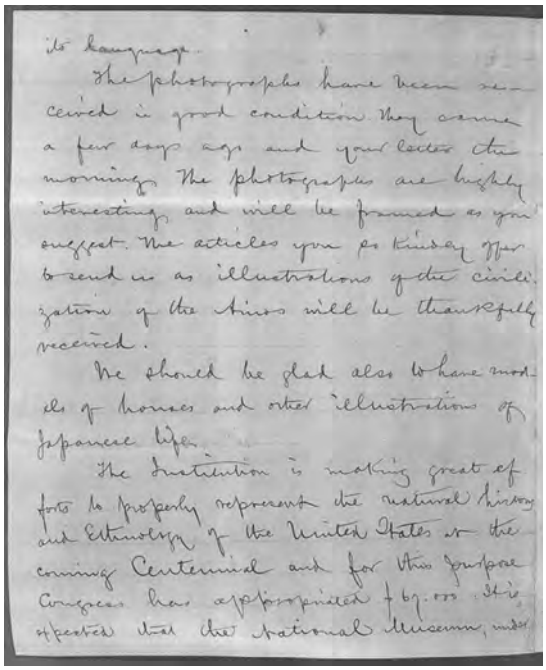
SMITHSONIAN INSTITUTION.

WASHINGTON, Nov. 27 1875

Prof. B. S. Lyman,

My dear Sir:

I shall forward your letter to President Gilman of the "Johns Hopkins University" with some remarks of my own in regard to the writer. What the result will be I cannot say as I know not whether they intend to appoint a Professor of Chinese. I think, however, that such an appointment ought to be made considering the wealth of the Institution and the growing importance to our country of a more intimate knowledge of China and the countries speaking

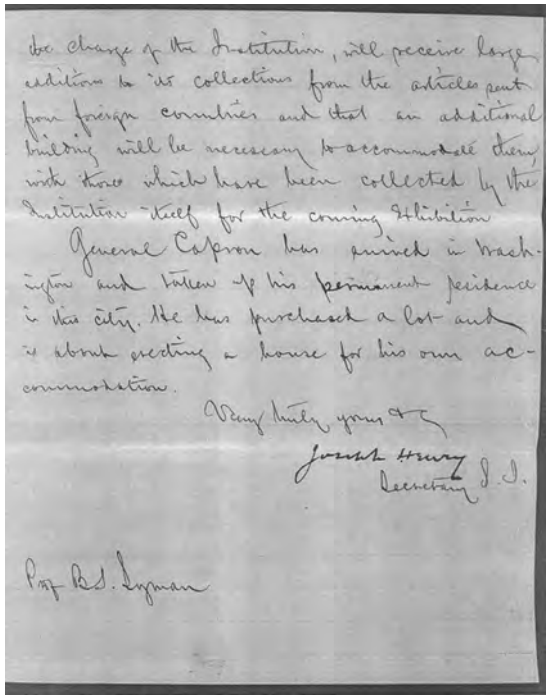


its language.

The photographs have been received in good condition. They came a few days ago and your letter the morning. The photographs are highly interesting, and will be framed as you suggest. The articles you so kindly offer to send us as illustrations of the civilization of the Chinese will be thankfully received.

We should be glad also to have models of houses and other illustrations of Japanese life.

The Institution is making great efforts to properly represent the natural history and Ethnology of the United States at the coming Centennial and for this purpose Congress has appropriated $67,000. It is expected that the National Museum, under



the charge of the Institution, will receive large additions to its collections from the articles sent from foreign countries and that an additional building will be necessary to accommodate them with those which have been collected by the Institution itself for the coming Exhibition.

General Capron has arrived in Washington and taken up his permanent residence in this city. He has purchased a lot and is about erecting a house for his own accommodation.

Very truly yours &c

Joseph Henry
Secretary S. I.

Prof. B. S. Lyman

第3図　ヘンリー書簡.(ペンシルベニア歴史協会蔵).

ライマンの手紙への返事でないか.正に偶然に得た幸運である.

ライマンの最初の手紙はヘンリーのバロメーターに関する助言の礼と,翌年フィラデルフィアで開催される万国博覧会に,スミソニアンが民族学をテーマにしたコレクションを出品する事を聞き協力したいと,アイヌや日本人文化に関係する展示品についての彼のアイデアを伝えたものである.2通目は,江戸での友Dr. D. B. マッカーテーの就職を頼んだ手紙である.マッカーテーは宣教師,医師,英語教師,そして中国ではアメリカ領事館の副領事をした人で,学者肌の中国通であった.間もなくニュージャージー州にジョンズホプキンス大学が設立するのを聞き,病気のミセス・マッカーテーが母国に帰りたがっているのに同情し,ヘンリーに頼んだと思われる.

ヘンリーは早速ペンを取り,ライマンに返事を書いた.スミソニアン研究所の用紙を使用し,日付は1875年11月27日,"My Dear Sir"で始まる(第3図).

拝啓　ジョンズホプキンス大学ギルマン学長へ私の意見も添えて,あなたからの手紙を送付します.教授のポストがあるかどうか知らないので,結果はどうか言えませんが,大学の将来のために,中国を始めとして外国の知識や言語を知ることが益々重要になることを考えると,私はこのようなポストを設置すべきだと思います.

写真は破損なく数日前に，手紙は今朝届きました．写真は非常に興味深く，あなたが言うように額縁に入れます．アイヌ文化のイラストレーションを送って下さるそうで，大変ありがたく思います．
また家のモデルや日本の生活の絵も歓迎します．
来るべきフィラデルフィア100年万国博覧会で，スミソニアンは米国の博物学と民族学を正しく説明しようと一層の努力をいたします．議会はそのため，6万7千ドルの支出を承認しました．スミソニアンの管理の下，国立美術館は外国からの美術品コレクションを拡大していくので，新しい建物が必要となります．百年祭博覧会のため集めた出品物もその建物に収まることになるでしょう．
ケプロン将軍はワシントンに到着し，この市に定住されることになりました．土地を購入され，そこに家を建てられます．　敬具

ヘンリーは，スミソニアンの仕事はもとより，多くの公私共の会合，その上1876年に開かれるアメリカ百年祭博覧会準備で他事多忙であったに違いない．しかしライマンの2通の手紙と写真が届くと，すぐに礼状を書いている．それもライマンが最も知りたいマッカーテーの就職の斡旋について書き始めているではないか．深い思いやりを感じる．またその頃には珍しい外国文化への関心，将来のスミソニアンおよび米国のための遠大なる計画，そして手紙の最後に彼の友であり，ライマンの上司であった開拓使顧問ケプロンの近況まで書かれている心遣いに，人間ヘンリーの人柄が躍動しているのを感じる．

当時ヘンリーは78才，ライマンは40才，二人の最後の手紙となった．ライマンの開拓使契約が12月末に切れ，帰国途上東アジアの国々に立ち寄った後，母国に戻り，ワシントンのヘンリー訪問を楽しみにしていたし，フィラデルフィア100年万国博覧会のスミソニアン展見学を大いに期待していた．しかし突然内務省の日本油田地質調査の仕事依頼を受けて，翌年早々準備に忙しくなり，ヘンリーとの文通どころではなくなったと思う．ヘンリーは万国博覧会の翌年に，腎炎を患い，1878年に没している．政府は葬儀のあった5月16日を休日にし，大統領を始めとして，政府，議会，学会等の公共団体が葬儀に参列した．2年後の1880年ヘンリー銅像除幕式は，再び公休日になり，5,000人以上の人々が参列したと言われる．

1981年10月の中頃，私は，関　秀志氏とフォーブス図書館を訪れることになった．いよいよオルドリッチの目録の文書に会うのだと緊張した．天井が高く，広い部屋に並んだダンボール箱を開き，一つづつ手にしていく文書は古色蒼然としていて，突然に時が数百年前に逆戻りした幻覚が生じた．かの有名な『日本蝦夷地質要略之図』，筆で書かれた『西洋昔物語ム森の中に眠れる美女』，「地学雑誌」や写真，大福帳，野帳等，目を見張るものばかりである．

一つのダンボール箱の隅に，全く他と異なるものがあるので手に取ると，文頭に“Dear Toku”とある一束の手紙が目に入った．すぐさま“馬丁の息子徳松”が頭を横切り，2，3通に目を走らせると，ペンシルベニア大学に入学した1890年から1981年の間に，Tokuが受け取ったノースハンプトンの人々からの手紙ではないか．今まで点のようだったTokuの存在が線となり，益々興味が高まっていくのを感じた．

3. 可憐なるToku

1987年6月24日，ライマンコレクション保存を支持して下さった恩人コロンビア大学図書館司書Ms.甲斐美和から電話があり，アマーストに近いホテルで私は久しぶりに彼女と再会した．ついで，友達のMrs. バーバラ モーリーを紹介され，すぐに前日ノースハンプトンのブリッジストリート墓地（第4図）に行き，ヘンリーライマンの墓を見つけた話となった．

ヘンリー ライマン（1809-1834）とMrs. モーリーの関係を述べる前に，ヘンリーについて語りたい．

ライマンの家系を紐解くと，彼は，英国から1631年1月4日にボストンに到着したリチャード ライマンの7代目である．ベンジャミン スミス ライマンは8代目で，両者共ノースハンプトンの最初の定住者，2代目のジョンとリチャードの血を受けていることが判る．

ヘンリーは1829年アマースト大学を卒業し，1829年にエリザ ポンドと結婚，3年後に宣教師としてスマトラ島に上陸するや，原住民に殺害され殉教者となった．後エリザはチャールス ウィリーと再婚し，5人の子供を得た．その5人の子供の一人が，Mrs. モーリーの祖父である．

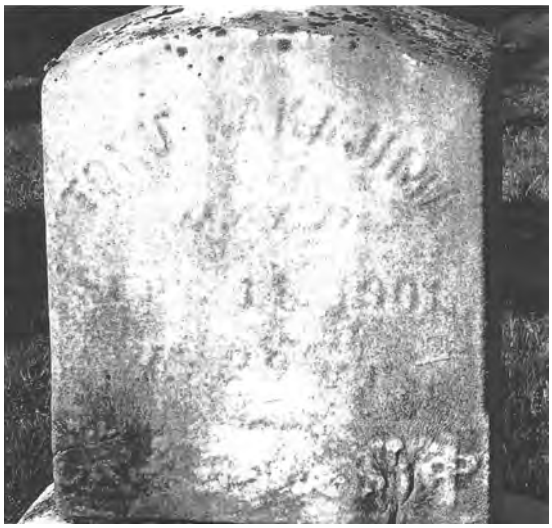
Mrs. モーリーがルートを辿ろうとスマトラへ旅され，受難地の十字架を実際に見て来た話を聞き，不思議な縁と熱心に耳を傾けている中に，何のきっかけか忘

第4図　ブリッジストリートセメタリー.(Historic Northampton蔵).

れてしまったが,「Tokumatsuとはどういう人なのですか」とメモを見ながらMs. 甲斐が突然質問された. Toku墓石の発見!(第5図)思わず息をのんだ. Tokuの実在の確証ではないか. フォーブス図書館でTokuへの手紙を見て以来, 6年の月日が流れ, 彼の存在が遠ざかりつつあった矢先であった. 驚きから覚めると, 私は彼の足跡をとことんまで追って行こうと誓った.

ライマンコレクションを見付けて以来, 時々僥倖としか思われない事が起こっている. Tokuの墓石の場合も然りで, 二人の発見がなければ, ニューイングランドの風雪に晒され, 目立たない墓石に到底気がつくことができなかったと思えてならない.

町の歴史によると, このブリッジストリート共同墓地は, 約1662年に村会で定められたという. 1885年に作られた墓場の地図原案を見ると, 多くのavenues(本道)とwalk(歩道)に分かれ, その中にライマン歩道もあるが, ライマン家の墓(第6図)は数ヵ所に分散している. Tokuの墓はライマンの祖父の墓の背後に立っていた. 江戸で親しかった友であり, 馬丁中嶋竹次郎を紹介者でもあるDr.ブケマに, ライマンは手紙



第5図　Tokuの墓石.

第6図　ライマン祖父の墓.

で「祖父の墓場は，父の場所よりずっと広いのでそこにTokuの墓をたてた．全く妙な話だが，祖父に先妻と後妻，12人の子供がいたが，先妻と二人の全然関係ない幼児の墓があるのみである．ライマン家の人達は，死後はさして肉体に重きを置かなかったのです．」と語っている．筆者は十数年前に，ライマン，兄ジェームス，姉エリザベス，妹マリーの墓を探し回ったが，墓碑は見付からず，目的を達する事ができなかった．ライマン家の死に関する哲学は，当時としては，異例と言うべきであろう．

Tokuの墓標は，ライマン，桑田権平，石工の三人の合作と言えよう．日本名を墓石に入れるアイディアは桑田が出し，ライマンの指導で石工が日本語を彫って仕上げるプランは，毎年ライマンがスミス大学とハーバード大学の卒業式に出席するため，フィラデルフィアからマサチューセッツにやってくる夏に決まった．

1905年の夏7月6日，すでにブルアー姉妹が建てていた大理石の小さな墓石に日本名“中嶋徳松”を英語名の下に入れる作業が，ライマンの指導の下に行われた．桑田が書いた縦の日本名を5分の2に縮めて，右から左に横書きにして彫るのであるが，ライマンと石工二人は，お互に意見を交わしながら仕事を進め，ブルアー姉妹，妹メリーが喜ぶ程の結果をもたらしたようである．「ただ石がやわらかいため，筆の細やかさを表すことができなかったが，その内に，友達に写真を撮ってもらって送ります」と権平へ知らせ，また「墓碑銘を見たアメリカ人には，判らないだろうし，無意味な装飾と思うかもしれないが，日本人だったら，満足するでしょう」と述べている．

ライマンは，ノースハンプトンへ行く前に，フィラデルフィアのエリート達の墓所ウッドランズにある馬場辰猪の墓を見学した．馬場は日本史上，自由民権を初めて紹介した人として名高い．彼は英国で主に法律を学び，帰国後，民権運動の先鋒として活躍し，1881年自由党の幹部となった．しかし1883年脱党して，明治義塾を起こした．爆発物の事件に関わったとして逮捕され，無実となった後，1886年渡米しフィラデルフィアに居住した．日本の政治や文化を講義し，甲冑，弓矢，刀剣等に関しての講演をして活躍している．刀剣に興味深かったライマンとも会っているのではないかと調べたが，その痕跡はない．馬場は1889年に客死した．ライマンのローカストストリート708番地の日本人クラブの集まりは1890年代に始まっているので，馬場とは全く会ってないと判断してよかろう．

ライマンが見た馬場の墓は，オベリスク型で縦書き，大日本が名前のトップにあり，四角の台座に彼の名が英語で彫られている．ブルアー姉妹が建てたささやかな墓碑と異なり，馬場の墓は大きく堂々としている．この墓碑は，ライマンの日本人クラブに加わっていた岩崎久弥（三菱財閥の祖弥太郎の長男，3代目の社長）によって，日本から送られたと言われる．馬場辰猪の墓は日本にもある．彼の遺髪だけであるが，明治の文学者，弟の馬場孤蝶と並んで谷中霊園に立っていて，フィラデフィアの馬場辰猪の墓を見た人なら，墓石の類似にすぐ気が付くであろう．

10月になると，ライマンはToku死亡通知を書き始

第7図　東京日々新聞.

めた．Tokuと会った桑田権平，加田貞一，桑田知明，安達仁造には，詳しい手紙を送っている．12月末近く，ライマンは賀田からTokuへの厚い看護を謝した手紙を受け取った．礼状と共に，「東京日々新聞」の記事“可憐なる同胞と米人の義侠”(第7図)が同封されていた．賀田がライマンの手紙を読んで感激し，新聞にブルアー姉妹やノースハンプトンの人々の献身的な看病を語った記事の全文を紹介しよう．

去る九月十四日米国大統領マッキンレー氏が兇徒の手に倒れたる当日同国ノーサムプトンの諸新聞は此挙国激悼の悲報を伝ふると共に可憐なる我が同胞中嶋徳松の死を報じて哀惜の意を表せざるはなかりし越えて十七日此可憐なる同胞の亡骸は万里の異域に在りながら同国男女数十の熱き同情の涙に送られ手厚き式を以てブリッチ街の墓地に葬られたり

彼れ中嶋徳松は如何にしてここに来たり如何にして此の如くなりしぞ彼は一介無名の青年固より深く言うに足らず唯人情紙よりも薄き今のに於いて彼をして此に至らしめた米人ライマン氏一族の高義深恵に至っては吾人之を江湖に伝へざるを得ず

地質学者たるライマン氏は明治の初年我が国に来たり開拓使の雇いとなりて明治六年より同八年に至るの三年間北海道の地質調査に従事し九年よりは内務省に転じ主として越後石油地の調査をなし十一年内務省を辞したるもなほ残務のあるありて十四年に至り漸く帰国し爾来今日に至る迄本国に在りて鉱山の踏査其他諸種の学会に力を致し近頃紐育より採鉱学に関する雑誌を発行し其中にも北海道の状況抔詳細に記載せりと云ふ中嶋徳松は氏が開拓使奉職中使用せる馬丁の一子なりしが明治十五年彼れが九歳の時残務の依托を受けたる賀田貞一氏が其調査を終り渡米せる際氏の依頼に応じ徳松を伴れライマン氏宅に到れり爾来二十年の久しきライマン氏は此可憐なる徳松を視ること恰も我子を視るが如く其の衣食より教育に至るまで給養愛育至らざるなくノーサムプトンの普通学校を卒業したる後は更にペンシルバニヤの大学の法学部に入れ在学二年の後事情ありて退学せしめたるも又之を有望なる書肆に世話し同書肆に於いても同人に相当の株を与へんとまでしたりしが偶々肺患に罹りて書肆を辞し之より後一時保養の為め地方に転地したるも病勢次第に進むを以てライマン氏の従妹ブルアー嬢は彼をノーサムプトンの自邸に引き取り令妹ファニー嬢と共に日夜看護の労をとりしも療養甲斐なく九月十四日を以て永眠せり其の葬儀の如くもブルアー姉妹の懇切なる尽力と友人の朋誼とに由り極めて鄭重に行はれライマン氏等祖父の墳墓の傍に埋葬せられたり同氏一族の義侠実に奇特の至りと謂ふうべし

明くる年，ライマンが待っていた朗報が届いた．賀田がTokuの家族の居所を一ヶ月余り探していたところ，彼の母親が桑田知明の手紙を持って，賀田を訪ねてきたニュースである．彼がライマンとブルアー姉妹，そしてノースハンプトンの人々の温かい援助，献

身的な看護等を話し終えると，彼女は涙を一杯浮かべながら，「四年前にTokuの妹を失い，今また徳松を亡くした．何と私は不運なのであろうか」と述べた．賀田が「他の子供は如何か」と問うと，二人の男子の一人は24才，横浜で商売をやり，下は21才と家族の話を続け，賀田は“Yes, Yes”と答えるのみであった．賀田はTokuの母が涙を拭いしばらくして，“DANNA NI OREIO MOSA-NEBA NARANU. REINO TEGAMI KAKIMASEN, ANATA NI NEGAIMASU”と言ったと彼女の真情を英語とローマ字でライマンに伝えた．

1901年12月17日，東京在の賀田貞一，桑田智明，西山正吾，山際永吾，偶々九州から仕事で上京した安達仁造，それに帰京していた島田純一の6人が集った．ライマンが賀田と桑田に送ったブルアー姉妹やノースハンプトン町の人達の美談，Tokuの死，葬儀等に関する手紙や，新聞に掲載された記事が回読された．欠席した坂　市太郎，稲垣徹之進，前田精明，杉浦譲三，山内徳三郎にも子細な報告が伝えられた．

この会合では，恒例の彼らの現在の活躍，ライマン先生の思い出，仲間の消息の話題よりも，主にTokuの一生，ライマン，ブルアー姉妹，ノースハンプトンの人々の美談が繰り返し語られたに違いない．

4. 功績の再評価

島田純一がライマンへ「今やライマン地質調査法が主要鉱山と一般地質調査に用いられている」と喜ばしい知らせを伝えてきた1902年は，日本石炭産業が破竹の勢いで躍進しつつある年代で，1882年ライマンの助手稲垣徹之進が農商務省鉱山局を辞し，三池炭鉱に移った頃の黎明期の面影は最早全く見られない．1889年に官営三池炭鉱が三井に払い下げられ，団　琢磨が三池の鉱山局事務長となった．当時の出炭高は年産29万トンである．この手腕家はライマンに育成された稲垣の技術力を充分に発揮させた．彼はベンジャミン スミス ライマンから教わった独特の測量法（地下等高線図法）を用いて作成した稲垣の三池炭田の図面を重宝とし“三池の玉手箱”と激賞した話は有名である．1903年の出炭高は年産111万トンを越えるまでになった．島田純一は，後に団の事務長のポストを継ぎ，西山正吾は，三井で地道一筋の技術者として尊敬された．『開拓使はよい専門家を招いてくれた．彼（註ライマン）はいい弟子を凭れた．今でも深く感謝している』と団がしばしば語っている．心底からの彼の実感である．

明治36年（1903），山内徳三郎が4回に分け，“北海道鉱業新報”に「ベンジャミン スミス ライマン氏小伝」を連載した．1979年3月の「エネルギー史研究」で今津健治氏が見事な解題をされているので，筆者の感想だけ加えたい．山内の文は簡潔にして明瞭，気品があり，読んでいる中に，筆者が十年前に苦労して1ページづつ読んでいったライマンの野帳の描写が，しばしば彷彿としてよみがえってきたのである．今津氏が言われる“小編ながら，体験をともにした者の情念が随所に満ち満ちて・・・”の評は同感である．130年余り過ぎた現在，ライマンが野帳に書いた短い行から師弟間の細やかな情感に触れることができるのは，筆力よりも野帳に潜む迫力ではないだろうか．

ライマンは，「29年ほどの歳月が過ぎたにかかわらず，私のなした仕事に興味を持って下さる・・・」と山内に伝え，遅ればせにやってきた光栄に驚くと共に感激した．その年に，日本鉱業会名誉会員に選ばれた．

1904年と言えば，日本では2月に火ぶたを切った日露戦争，アメリカではセントルイス万国博覧会を想起するであろう．後者は，ルイジアナ買収百年記念，オリンピック，万国博覧会と三大行事が重なり，全米を湧き立たせた．大規模な博覧会の日本館は大いに注目され，多くの日本人も太平洋を越えてやってきた．4月にライマンは，すばらしい英文の手紙を団　琢磨から受け取った．ライマンを日本鉱業会の恩師と讃え，優れた日本最初の鉱山技師を育てたと激賛する団の手紙を読み，1873年訪日の際，若者たちが地質技術分野で日本の先駆者になるように願った夢が正に実現したと，ライマンは喜びを噛みしめ，何度も読み返したと思えてならない．手紙に「The Mitsui Mining Company」の立派なパンフレットが同封されていた．セントルイス万国博覧会に展示されたコピーである．ライマンは三井鉱山会社についての記事を専門誌に執筆中であった．団の会社は明らかに，世界を目指して発展しつつあった．

大国ロシアと小国日本の日露戦争が始まると，日本を応援するアメリカ大衆が多かったが，ライマンは，10年前の日清戦争の時と同様に反戦論を唱えた．農商務省鉱山局のM. I. Hosoi氏から，ライマンの昔日の北海道地質調査を称賛した手紙，「日本鉱山業スケッチ」のコピー，それに旅順戦争の絵はがきが送られて

きた返事に，彼は北海道石炭の貢献を謙虚に語り，戦争については，日露両国の多大な破壊と人命の喪失を思うと胸が張り裂けると心情を述べ，軍事力よりも教育，産業に力を注ぐべきだと力説している．約10年前の日清戦争の時よりも激しさは失っているが，反戦の断固とした態度は変わっていない．

1905年11月3日天長節(天皇誕生日)に，彼はフィラデルフィア日本人クラブで演説を行った．当時フランス公使であった本野一郎の言説「日本がフランスへ優れた美術を紹介していた頃は，半野蛮国と呼ばれていたが，七万人のロシヤ兵を殺したことによって，フランスが日本を最高の文明国とみるようになった」を引用し，戦争観の愚劣さを述べた．当時反戦や平和を唱えるのは，並々ならぬ勇気が必要であったと思う．ライマンは平和論者で，他愛主義を旨とし，菜食主義者でもあった．数多くの菜食レシピを書き，菜食を基本とする食生活を奨励した．彼こそ21世紀人の資格ある人物だと言ってよいのではなかろうかと思う．

5. 日本再訪

明治43年5月31日「日本鉱業会誌」の記事によって，ライマンの日本再訪の概略を知ることができる．

> らいまん氏ノ帰国　本会名誉会員べんぢゃみん すみすらいまん氏ハ会誌第262号ニ記載シタル如クふぃりっぴんノ鉱山調査ノ途次本邦ヲ通過セラレシ際滞京僅ニ三日ナリシモ該地踏査ヲ終ヘタル後四月ニハ帰途再ビ本邦ニ立寄リ暫時滞在セラルル計画ナリシ為メ本会ヲ始メ北海道及ビ九州ノ鉱業家ノ間ニハ同氏ノ歓迎ニ付種々評議シタルニ過日同氏ヨリノ来信ニ不幸ニシテ「まらりや」ニ罹ラレシ為メ直ニ欧州ヲ経テ帰国セラルル旨ヲ報シ来レリ依リテ舊門弟ノ諸氏ハ電信及ビ手紙ヲ以テ委細ノ状況ヲ問ヒ合ハセタルモ未ダ何等ノ回答ナシト言フ兎モ角遺憾ナル事ト言フベシ

この記事を土台にして，出来るなら詳細に調べ上げようと志したが，時間をかけたにしては，あまり多くの資料が集まらなかったのは残念である

さて，フィリピンで400マイル程の鉄道を建設している会社の石炭調査の話が早急に決まったらしく，フィラデルフィアからサンフランシスコへ向かう1週間前，1907年11月6日に，ライマンは安達仁造へ彼の乗るコーリア号が日本に寄港すると手紙で急ぎ知らせた．横浜，神戸，門司と長崎，横浜には1，2日停泊するため，是非東京在の助手たちに会いたいという簡単な内容である．

第8図　来曼先生と往年の助手との再会．明治40年(山際永三蔵)．

横浜にコーリア号が着いたのは，1907年12月8日と筆者は判断し，以後あちこちの資料を集め，ジグソーパズルのように，上手く当てはめてライマンの日本滞在中の行動を記してみた．

まず助手達はライマンを横浜港で出迎えた．そして宿舎帝国ホテルへ向かい，そこで昼食を共にし，写真館丸木で記念写真を撮った．これが桑田権平著『来曼先生小伝』で「来曼先生と往年の助手との再会明治40年」の見出しで紹介されている写真(第8図)である．前列左より，賀田貞一，桑田智明，ライマン，西山正吾，島田純一．後列左より坂　市太郎，山際永吾，山内徳三郎，前田精明，安達仁造で，他の二人，稲垣徹之進は明治35年に死去し，杉浦譲三は神戸で待機中であった．約33年前人跡未踏の北海道の奥地で苦労を共にした助手達が，今や日本石炭事業の中堅となり，堂々として彼を迎えた姿を眼前にしたライマンの心情は如何ばかりであったろうか．

晩餐会は紅葉館で行われ，翌日は助手夫妻が揃い，上野の精養軒で大歓迎会が催された．常日頃アメリカでライマンは助手たちの写真を彼の家族として紹介し自慢していた．彼は大家族と対面し，痛く感激したに違いない．

神戸では，桑田権平と松方正雄を中心に，フィラデルフィア日本クラブの連中がライマンを歓迎した．松方はペンシルベニア大学でスポーツマンとして名が知

れた人で，Tokuと付き合った数少ない日本人の一人であった．彼はかつてライマンの上司だった大蔵大輔兼勧農局長松方正義の四男で，後タイガースの初代オーナーになっている．

神戸に汽船が着くと，彼らは早速ライマンを連れ出し，あちこち案内した．ライマンは，午後10時にようやく解放され，オリエンタルホテルに落ち着くという慌ただしい一日であった．翌朝は川崎造船所や三菱造船所等を見学，午後2時出帆すれすれに船に戻った．

その後汽船コーリアンは，門司に午後中停泊，翌日長崎に半日と，その度にライマンは歓迎を受けた．東京から長崎の一週間ばかりは，時が飛ぶように過ぎ，目まぐるしく変わるシーン，日本の目覚ましき発展，なかんずく日本人の心からの歓迎に圧倒され，手紙を書く暇さえ無かったが，ライマンが日本滞在最後の日に，長崎で一通だけ梶原仲治へ手紙を認めている．

梶原は島田純一の娘婿で，夫婦で11日に大阪から神戸港に駆けつけたのであるが，すでにライマンは山手のレストランへ連れ去られ，後の祭りであった．5年前，ローカスストリートの家を訪ねて来た背が高く礼儀正しく，誠実な島田の娘の許婚青年に好意を持っていた．すれ違いで会えなかった不運を遺憾に思い，日本を離れる前に，一刻を見つけて書いた詫び状が残っている．

東京を去る前夜，ライマンは安達によって，彼の功績に対し，勲章贈与と鉱業会の有志から功労表彰の贈り物として金一封（2，3万円）の贈呈が計画されているのを知った．あまり突然のことであったので，彼は戸惑い回答を避けたが，多忙の日々の合間に，この問題に悩んだようである．日本人の満ち溢れた好意に強く心を引かれ，受けるか，受けまいか心が揺れに揺れ，決断に苦しんだ．

しかし日本を離れ，上海に近づく頃になると，彼の学生時代から身に付けた政治的平等の信条を固持すべきと，叙勲辞退の決断を下した．功労金についても，“皆さんの善意に絶大な感謝をし，強い感銘を持ったが・・・”と彼の気持を述べ，“十年前であったら，誘惑に打ち勝たなかったかもしれないが，現在は経済的に次第に良くなってきたので，これもお受け出来ない”と断った．そして“将来の地質学の発展のための基金にしたら如何か”と彼のアイデアを付け加えた．

ライマンは無事マニラに到着，12月30日に山内徳三郎へ，彼が気候も，市も，人々も大変気に入り，心身共に上々あると書いている．手紙から彼の元気一杯のスタートが伺われる．

1907年の始め，安達仁造から助手たちと北海道鉱業鉄道会社の井上，九州の安川，三池の団共同の招待計画案が送られてきた．三池，筑豊，北海道の主要炭鉱の視察，いわき炭田，越後油田等々，また東京滞在を含め，少なくとも一ヶ月はかかるプランが練られている．感謝と敬意を払った至れり尽くせりの招待である．しかしライマンの返事はおろか，半年ばかり，これと思う日本再訪問に関する資料を見出すことが出来なかった．

1907年3月23日のマサチューセッツ州西部の新聞「スプリングフィールドデイリーリパブリカン」は「ライマンが12月末にフィリッピンに到着し，1月までは元気で活躍していたが，3月11日のケーブルによると，彼は赤痢に罹り，重態となったが，ようやく回復の兆しが出始めた．まもなく危機を脱するであろう」と伝えている．

ライマンの親友，ドクターブケマには，『アミーバー赤痢』と「マウンテンマラリア熱」であったと書いている．その手紙で，日本での大歓迎を語り，助手たちがライマンの4月の日本訪問が取り止めになり大いに失望落胆したと述べ，一年か二年内に再び日本訪問したい希望を大切に抱き続けたいと，彼の心情を吐露した．

明治44年（1911）4月地質調査所員佐川栄次郎はライマンをローカストストリートに訪れた．訪問記「ライマン氏を憶ふ」は，佐川のライマンに対する温情が滲み出ていて大変興味深い．次のエピソードもその一つである．「帰りには氏の寓居まで同行して別れた．日本にて再会を期すと言ふたら，疑わしと答えた．氏は自分の望みにも亦敬慕せる門下生の願ひにも拘らず，日本再遊は出来ぬものと知っていたらしい．」“疑はし”の短い言葉の中に，今や愛する助手たちとの再会は，不可能になってしまったと思うライマンの寂ばくたる感情を，佐川は感知したに違いない．筆者の胸にもひしひしと感じられる．

注1　ヴィクトリア女王の死と夏目漱石．20世紀の幕開け．http://www.gaia.h.kyoto-u.ac.jp/~saito/eizou/1.htm. 22 jan. 2007

注2　桑田権平（1937）：来曼先生小伝　p.97

FUKUMI Yasuko（2008）：A note on Lyman（22）．

＜受付：2007年6月14日＞